

この日の朝食が最後の食事となった。イネスさんは毎回食事の写真を撮った。帰国後に友人たちに日本人がどんな食事をしているかを見せるためとのことだった。まず、朝一番のブラック・コーヒー。これはイネスさんと私の共通点であった。私は納豆好きで米食だが、イネスさんのためにパン食を用意し、ドイツの定番のハムとチーズではなく、オカズとスープを調理した。ドイツではスープは朝飲むものではないらしい。日本人なら味噌汁なしの朝食はないのに。毎食ごとに美味しいと言ってくれた。

実は最後の晩になって、彼女から打ち明けられたことがあった。それは日本のトイレの「ウォシュレット」の使い方が全く分からなかったということであり、仰天してしまった。ホテルもすべてウォシュレット形式になっているが、ガイドからは「日本のトイレは世界で一番機能的で、清潔なトイレです」というコメントがあっただけでどのボタンが何を指すかの説明はなかったというのである。そのためツアー客は質問もせず、用を足した後、水を流すレバーをあちこち探して、事なきを得ただけで、ウォシュレット機能は使わなかったということだった。さっそくボタンの使い方を説明したが、日本語の文字、また、小さいマークのみでは外国人には理解できないということがよくわかった。申し訳なかった。

名残惜しくも、帰国する日になった。帰国便は羽田のインターナショナル・ターミナルから出発のうえ、港南台駅前から直行便リムジンバスで50分。非常に便利である。彼女の荷物は大小のスーツケースとリュック、バッグ、紙袋の5つであった。彼女のバッグをちょっと持ってあげただけで、ずっしりと重いので、ドイツ人の体力の物凄さを感じてしまう。ノー・プロブレムというが、無事に持って帰ってほしいものだ。



駅前でバスを待つ

私たちは20年くらい前に、ロンドンの語学学校で知り合った。ドイツ人、イタリア人、スペイン人、オーストリア人、韓国人、日本人の小さい英会話のクラスだった。私はなんと、ミス・ディクショナリーというあだ名を頂戴した。単語だけは何とか知っていたのだが、文にする表現力がなかった。それ以前に発語するエネルギーがなかった。あるドイツの男性は絶えず「アー、ウー、ウォー」と他人に口を挟むすきを与えないように言葉にならなくても発声し続ける特技があった。トピックスとしてテレビや映画の話になった時、イネスさんは真顔でそんなものは役に立たないばかりか、害毒となるという発言をして、ドイツの人から呆れられていた。見るからに真面目でストイックな女性だった。彼女が旧東独出身ということが分かり、私は非常に関心が湧いた。それはベルリンの壁が崩壊して10年もたっていなかったからだった。授業が終わった後に、イネスさんと大英博物館に一緒に行ったりして親しくなった。私たちがクリスチャンであること、彼女の牧師が日本に関心があったことが重なり、親しく手紙を交わすようになった。イネスさんが訪日し、その2年後に私たちが訪独し、イネスさんの再度の訪日となった。

彼女は東独時代にクリスチャンであるがゆえに受けた様々な差別や迫害については言いたくないようであった。けれども、それに屈せず信仰を持って歩み、懸命な勉強を重ねて、経済的、社会的に自立して、今は高いステイタスを得ている。また、外国の教会とパートナーシップを持って、交流にも関係しておられる。イネスさんの学び続ける努力と誠意溢れる姿勢にいつも圧倒される。また、つつしみ深く、相手に接する優しさに感激する。彼女と友人になることによって、多くのことを学んだ。ドイツに対する思い、また、キリスト教の歴史、信仰のあり方など深く味わい、知り得るようになったことをとても感謝している。また、日本に来て下さいね。今度こそ、タカラヅカを楽しみましょう。